

頼政と通円への象面

平等院住職

神居 文彰

人は、争わずにはいられない存在なのであろうか。自らの信条のため、怨親、愛憎。

攻撃性は人間の本質的欲求であると聞いたことがある。はたして、仏教では生前争いに身を投じた者は、修羅道に墮ちるとされている。

平等院には、現在頼政自刃の場と伝えられる「扇の芝」や、塔頭最勝院には杉の原木の根本に頼政墓所として宝篋印塔が据えられ、塔頭浄土院には、頼政に縁故のある伊豆守大河内源信古による供養塔が建立されている。

また、室町期の公家様頼政画像や、備前少将継政筆の絹本着色武人画像、法橋善長作武家木像、別に公家姿の彫刻も伝承し、春亭『宇治川合戦図』の版画や多色刷頼政卿自刃之図、はては弓・甲冑も伝来する。特に頼政筆と伝わる『和漢朗詠集卷下断簡(平等院切)』は流麗で、心が澄むような筆遣いである。平等院自ら頼政伝説の一旦を担っているわけであるが、当院を中心に頼政に対する想いがどれほど強いかわかることが出来よう。

これらからは、「歌仙」と評され風流を愛する文化人であり、鶴を破る武人として、また治承の役で散った悲劇の武将として、転換期の時代を生きる相反する性格を持った人生をうかがうことが出来る。

しかし、今ここで頼政の生き様を定義したところで何もならない。むしろ、どれほど言葉を尽くそうとも、頼政の胸中を表現することなど出来るはずもない。

人は、自刃ということを選ぶことができるがため、人はこのことを問い続ける。

自らが選んだ死の態度であるにも関わらず、僧の前に現れる頼政の心情は、単に供養を望むものではない、恨みとは別種のものではなからうか。毎年墓所の前で営まれる五月二十六日の「頼政忌」で常に感じることである。生きたいと頼政は感じていたのであろうか。

「心の底まで歌になりかへりて」(鴨長明『無名抄』)といわれた彼の辞世の句に、寺内では二つの意見がある。末尾が「ける」なのか「けり」なのか。

諸本の校訂は別として、『平家物語』巻四「宮御最期」では、「埋木の花さく事もなかりしに身のなる果てぞかなしかりける」であり、世阿弥の『頼政』は、後シテが「身のなる果ては 哀れなりけり」と謡う。「けり」は、伝聞の過去というが、むしろ自己の過去からの動作の継続における回想を意味し、気付きが強調される。この時代であれば、けり・ける・けれという三段活用で、連用形を承ける。

いずれも、哀しみ切なさを嘆じ、自分らしく生きようとし、思い通りにならない人生に抗い、夢破れていった心の目覚めである。私たちは、散っていたものにどのような眼差しを向けるのか。

やり遂げたという静かな心を持つ通円と、志し半ばに自刃した頼政。しかし、そこに死は平等におとずれる。頼政の家臣であった通円の墓所も、平等院に安座する。

一面物である頼政の能面は様々に展観され拝見する機会も多い。目に金輪が嵌め込まれた独特の面は、悔しさや怨念を醸し出す。小学生の長男に面を見せたところ、「涙のない泣いているお面」といった。泣くべき時に泣けない事は何を表すのか。

裏面を見て、なるほどと感ずる。齒の裏側にあたる口

元に独特の品位が感じられる。馬齢という言葉で分かるように、齒はいのちの成長を表す。

舞狂言「通円」は、「頼政」の詞章を古川右内（太敬庵通円政久）が追体験する。通円も茶という嗜好と芸道の間を止揚する。

能会で狂言「通円」がかかる事自体が大変稀であり、宇治河畔での二つの歴史の営みの中、僅かに覗く二人の人物の死の瞬間を分離する作業がこれまでのことなら、相反する性格を持つ二曲を、今でこそ私たちは二つの空間の間を彷徨い、死の瞬間の生き様を共有することが出来るのではないだろうか。

頼政と通円の生き方を肯定することも否定することも許されない。

名所旧跡数えの中、なぜ平等院なのか。

おそらく、平等院には歴史の陰に埋もれ切ることの出来ない多くの、明らかな死に様が示されているからである。ろう。